



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 602 回 「三猿社員」と名付けてみた！

2014.11.9

日光東照宮、中でも神厩舎にある左甚五郎作といわれる「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿が有名である。抜本的にニュアンスは違うのだが、3つの動作をやらないという意味で「遅れず」「休まず」「働かず」の問題社員が存在する。

無理やりこじつけて、これらの輩を「三猿社員」と名付けてみた。

頭の中は趣味や、彼女の事、遊びの事、楽しい友達付き合いしか考えず、精力を使い果たし、肝心の働く余力が残らない。だから休日明けの月曜日は腑抜け状態で会社に来る。

それでも「三猿社員」は遅刻せず休まない。

でも決まって仕事しないで働かない、困った人達である。

この連中の背景には、年功序列、モーレツ社員といった先輩たちへの嫌悪感がある。

いくら働いても所詮、たいした事なんかないし、変わらないという、半ば諦めた考え方がその根底にある。会社至上主義、家族を犠牲にしてまで働いてきた祖父や父の姿に対する拒否感が根付き、自分らしさを求めるあまり、安易な快楽を求めてしまう。

苦難を乗り越えた結果得られる「真の幸福」を極めることをせずして、目先の享楽に耽ってしまう、極めて幼稚で狭隘な価値観の持ち主と言わざるを得ない。

しかし近来、これら「三猿社員」は業種・業態によって、だいぶ状況が異なってきた。

いわゆる成果主義、ノルマ制、インセンティブ制度の普及、徹底により、「三猿社員」は社内でも阻害される悲しいかな「邪魔な人」、つまり不要な人員となってしまった。「遅れず」「休まず」はともかく、「働かず」の「三猿社員」は、当然のように職を追われ、いつしか非正規社員、あるいは無職に転じる宿命だ。企業はもはや、「三猿社員」をいつまでも雇い続けるほど余裕はない。

しかしながら三猿社員、決してめげずに、相変わらず社会への不平不満を言い続けている。

彼らの精神的支えは「労働市場と環境改善」と題した、国家的大命題だ。

労組はもちろん、マスコミや御用学者も、官民あげて企業、経営者の責任、そして改革を迫っている。労働市場の改善を、一方的に雇用主に押し付けるだけでは、何ら解決に至らない。

制度やシステムを変えることも重要だが、本来的労働力、「ひと」としてのスキルアップや意識改革のための施策が、それ以上に重要となっていると思う。少し冷静に分析すれば、雇用需給のミスマッチングも、この「三猿社員」の存在が原因しているかもしれないのである。

我社の「三猿社員」予備軍、彼らを「人財」として使える社員に変えるには、ちょっと時間と辛抱が必要かもしれない。何故、「三猿」が敬遠されるのか、凝り固まった、彼らの偏屈ともいえる思考を変えなければならない。原因を探って、解決してやらなければならないだろう。

「働かず」では通らないこと、働いた結果、お客様や他の仲間のスタッフに、そしてその企業に貢献できた時の喜びを実体験させてあげることだと思う。

それが本来求めるべき、自分自身の最大幸福につながっていくことを、**あなたが**…教えてやらなければならないはずである。そう、誰かやるのを待つのでなく、あなた自身がやることです！